



Title	<紹介> 渡邊英理著『中上健次論』
Author(s)	大畑, 凜
Citation	語文. 2023, 120, p. 44-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95418
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

渡邊英理著『中上健次論』

大畑 凜

副題を添えることなく、作家の名前を真正面に据えた本書は、五〇〇頁を超える文字通りの大著であるが、必ずしも作家のキャリアのすべてを対象に収めているというわけではない。主要な分析の対象となるテクストは、中上文学の中期にあたるとされる時期の短篇連作集『熊野集』であり、本論第九章のうち、二章から七章までの六章分はこの短編集の分析に充てられている。著者自身が序章にあたる「はじめに」で語るように、本書は中上文学を読み直すにあたって「(再) 開発文学」なる視角を方法的に導入するものであり、その点で議論の焦点は絞られている。だが、中上文学の間テクスト性やその同時代的文脈へと徹底的に肉薄していく本書は、佐藤春夫や坂口安吾、谷崎潤一郎、大江健三郎、芥川龍之介、島崎藤村から『古事記』や『今昔物語集』などにまで至る中上文学のプレテクストだけでなく、レヴィ・ストロースやフアン・フロイトなどを経由し、更には現代的な理論的導きとして動物論やフェミニズム／クイア・スタディーズ、アナキズム人類学などを参照することで、一つの章のなかですらその読解を劇的に展開・転調させていく。それゆえ、本書のツールな要約や紹介はそう簡単ではなく、ここではあくまで筆者の関心において本書の核とおもわれるポイントを紹介していきたい。

著者自身の造語である「(再) 開発」とは、近代的な開発の力学と現代的な再開発の力学とが同時に併存し複合的に組み合わされた状況を問題化するものである。本書はこの視角から、みずからが育った被差別部落の「路地」の「(再) 開発を描いた中上の小説群を紐解こうとするものである。そのうえで、本書は「(再) 開発に貫かれている資本と国家の共謀的な力学に抗するための思想的ヴィジョンをも中上文学のなかに見出そうとするのだが、ここで鍵となるのは、本文では「群れ」という形象を通して論じられていく集団性・集合性に帯びたその両義性であるだろう。

「あらかじめ革命的でもあらかじめ反動的でもない、潜在性としてある、方向づけられることのない人民の「力」(三七五頁)。これは本書の最後を締め括る第九章「仮設と雑草」に現れる一節であるが、こうした「人民の「力」——そして人間にのみ収斂されない動物物の「群れ」——に帯びた両義性の重要性は、とりわけ第四章「被差別の人類学、賤者の精神分析」や第七章「媒介者の使命」でも論じられているポイントだ。路地の「(再) 開発において、被差別部落の人々は抵抗に寄与する場合もあれば、開発のエージェントとなる場合もある。作家自身、開発のエージェントとして振る舞うことになるみずからの家族をその小説のなかに虚構化を伴いつつ書きとめたように、抵抗と協力は路地という空間のなかに同居している。そのうえで、こうした複雑な両義性の次元へ文学を通じて介入し分け入ろうとした作家の小説群の可能性を拾い上げながら、著者はこの可能性を継承するにあたって、それが「読み手という媒介

者の批判的知性の想像力如何に賭けられている」(三二〇頁) ことを指摘する。この「読み手という媒介者の批判的知性の想像力」が発揮されるのが、第四章における小説「石橋」をめぐる稚児の身体に帯びた同性愛的次元を介しての市民社会秩序や天皇制にたいする、転倒と攪乱へのめくるめくような読解であり、また外部との間での交通／交換の過程を描いた小説「葺き籠り」から、どちらに振れるともわからない「媒介者の使命」を浮かび上がらせた第七章であり、第九章での路地の消滅を描く『地の果て至上の時』のなかに萌え立つ「雑草」という名の「群れ」の形象を介して広げられていく、戦時／植民地下アジアの女性たちにあるわれた性暴力への批判にも結実し合流する読解であるだろう。両義性を帯びた「群れ」の「力」のなかに、別の世界への可能性がそこでは読み取られる。

また、本書を読み進めながら、海外の都市研究や地理学の領域において近年進められ、日本語圏でも紹介と導入が始まりつつあるインフラ研究との接続可能性についても考えることになった。インフラ的転回とも呼ばれるこの趨勢は、インフラをダムや道路、上下水道、鉄道などに限定させることなく、広く「人々やモノを媒介し生を支えるもの」として定義することで、一方では資本や国家に資するインフラが暴力や排除、差別を惹起するものであることを批判しながらも、他方では資本や国家に抵抗する人々にとつての「インフラ」とはなにかを問いかけるものである。それは権力分析におけるマテリアルな次元への、あえて言うならば唯物論への現代的な回帰であるのだが、著者が構想してきた(再)開発文学との共振性はあ

きらかだろう。道路やスーパーマーケットのために土地と家を取り上げられ壊されていくという同時代的な文脈において、血縁的な家族関係に回収されない親族関係の場として、また偶発的な「仮設」が積み重なって作り出された「避難空間」として路地が描き出されるとき、社会的インフラとしての路地が、またそれを書きとめる中上文学そのもののインフラ性が垣間見られる。第九章の末尾、『地の果て至上の時』の最後で路地跡の草むらに放たれる火を、男たち(「アニ」たち)に帯びた負の「男らしさ」を燃やすものであり、同時に路地の火葬を象徴するものとしても捉える著者は、デリダを引用しながら、そこになお残るであろう「灰」が、大地へと分解されることで雑草——そして植物の繊維から作られた紙に刻まれた文字——へと再生することに「希望の火」を託している。路地は火に包まれてもお消滅することなく、灰というマテリアルな塵とともに大地として確かにそこにありつづけているのだろう。

最後に、色違いの鮮やかな二つの葉(スピン)が付けられ、また写真家・小原佐和子が写しとった新宮の街をカパー・口絵に用いた、間村俊一による重厚な質感の装幀が印象的な本書は、それ自体が替えのきかないマテリアルな書物としての重みを有していることを付言しておきたい。

(インスク립ト、二〇二三年七月、五一七頁、四、〇〇〇円+税)

(おおはた・りん 日本学術振興会特別研究員PD)